最優秀賞（函館地方法務局長賞）

コンテンツの力

函館聾学校　二年　福井稜馬

ぼくは聾学校に通っています。小さい頃、家の近くの公園で遊んでいる子どもたちに、「一緒に遊ぼう。」と声をかけてよく遊んでいました。ときには、中学生や高校生、そして大人とも遊ぶことがありました。ぼくは両耳に補聴器をつけていますが、それでバカにされたり無視されたりすることは一度もありませんでした。それが当たり前だと思っていました。

そんなある日、「聲の形」という映画を見ました。主人公は聴覚に障がいがあり、あまりしゃべることができない女の子で、その子をいじめる男の子との様子が描かれた学園アニメです。ぼくは、「聴覚に障がいがあり、話せないだけでいじめられるのだろうか?」と正直驚きました。「でも、アニメだけの話で、現実にはありえないのでは?」と思い、いろいろ調べてみると、予想に反して、子どもだけでなく社会人を含む大人もいじめられる事件があるということが分かりました。他の人と比べて能力が低いから当たり前だと思われ、給料を下げられたりパワハラを受けたりしたことがあると書かれていました。ぼくの当たり前は、社会の当たり前とは違っていたのです。そのとき、何か変な疑問がわいてきました。「大人の社会でもいじめられることがあるというのに、ぼくと一緒に遊んでくれた人たちは、どうしてぼくをバカにしなかったのだろう?」もちろん、一緒に遊んでくれた人たちは優しくて、あまり気にしない性格だからという理由があるのかもしれません。しかし、ぼくが考える一番の理由は、「聲の形」という映画によって、障がいを持っているからという理由で、いじめてはいけないという気持ちを持つようになったからではないでしょうか。実際、一緒に遊んだ人たちに尋ねてみると、「映画の名前は忘れたけど、そういう内容の映画があったのは覚えている。」と答えた人がほとんどでした。そのため、映画やアニメによって、障がい者も同じ人間だという尊重を持つようになったようです。この尊重という気持ちを表す言葉の一つに「リスペクト」というものがあるということを学校の先生に教えてもらいました。早速辞書で調べてみると「リスペクトとは、ありのままの相手に敬意を持つ、尊重する」という意味で、だれかと比べて秀でている人を敬う気持ちとは違うということでした。

実は「聲の形」には続きがあります。小学校でいじめを受けていた女の子が転校することになり、今度は女の子をいじめていた男の子が周りにいじめられることになるのです。そして、この二人は高校で再会し、昔の出来事を許し合うという運命をたどります。この場面を改めて考えてみました。「許す」ということは、ただ過去をなかったことにするのではなく、お互いの痛みを本当に理解しようとすることなのだと感じました。簡単なことではないけれど、人と向き合う第一歩なのかもしれません。言葉にできない思いがあっても、心を通わせることはできるのだと気付きました。それが、この作品が伝えたかった本当のメッセージの一つなのかなと思います。

この物語を通して、たとえ相手に傷つけられた過去があったとしても、もう一度向き合う勇気があれば、人と人はわかり合うことができると気付きました。誰かを尊重するということは、その人の過去も含めて受け入れるという意味もあるのかなと考えるようになりました。そして、いじめや差別のない社会をつくるにはそうした心のつながりが大切だと思います。リスペクトの気持ちはきっと許すことにもつながるはずです。

これからぼくができることを考えたとき、アニメやマンガなどの「コンテンツ」の力を使うことで、リスペクトという気持ちを誰もがもてるようになるのではないかと思います。実際、「聲の形」はフィクションですが、このようなコンテンツは障がいの有無、男女、年齢、住んでいる地域などにかかわらず、とても親しみやすいものです。そのため、学校の授業でこのような作品が取り上げられることで、子供のうちから相手に敬意を払う、尊重するという気持ちが育てられるかもしれません。また、大人になってからでも映画やマンガを通して忘れかけていた大切な気持ちを思い出すきっかけになるかもしれません。また、コンテンツには、言葉で直接伝えるよりも心に残るものがあるので、ただ楽しむだけで終わらせるのではなく、そこから学んだことを行動に移すことができる人が増えてほしいとぼくは願います。そして、ぼく自身も誰にでも優しくできる人間でありたいし、これから出会う人にも障がいがあるなしに関係なく同じように接していきたいと思います。